

七十、車無し、底んぞ懸を用いんや  
今に抵り、挽做、強年なりと曰う  
鶯鷓、儘に新綴を遣わしむ  
猿鶴、奈何んぞ旧縁に違ふことを  
赴く所、期せず天一定  
無妄に於いて動く物、みな然り  
世間多少営々の者  
知るや否や、此の翁、真に憐むべきことを  
この意味は、「私は七十の齢まで車もなく、貧乏暮しをしてきた。この年になれば、普通、天子から退官の車をもらって引退するところだが、そんなものもほしいと思わない。今になって、お前は丈夫で若々しいから官途につけ」といわれ、役人の新参になるのだが、そうなると、今までの野人どもとのつき合いをどうしよう。併し、人生の帰趨は天であり、真実の帰結は命による。世間の稼ぎ人たちに、俺の心がわかってもらえるだろうか、というほどのものである。

及ばず、やがて乱を起し、事成らずして自刃した。中斎は碩学佐藤一斎が推賞しているように、王陽明の知行合一に傾倒する一代の学者であり、産もあり地位もあり、己の信ずる大虚の実践を心掛ける士であった。人をして感奮興起、欣躍にたえざるところを実践に移したのが、大塩の乱である。その点が大正時代の米騒動の先達・魚津漁民のかあちゃん連ともちがうし、敗戦時の米よこせの左翼連ともちがう。そして、授業料値上げ反対や、医師の資格問題で騒ぐ連中とは、次元を全く異にしているのである。人が大虚になり、霊体になることが、維れ新たを生むのである。

中斎を支援する佐藤一斎はその後、天保十二年に、七十歳で昌平饗（幕府の最高学府）に出仕を命ぜられているが、その辞令をもらった時、「天保辛丑、凶らず微命を蒙り、漫ろに賦す」と題して左の詩をつくった。

太乙を手探て天閻を叩かんことを

この意味は、「たちまち、雲と雨が天地を覆って、豪雨と雷鳴が、海を踊らせる。何とか、老子のような人が現われて来て、天の命ずる最上の方策を以て、この事態を打開してくれないものかなあ」と、いうほどのものである。

一斎は、八十八歳で此の世を去った。マイナス明治九年である。人間の思索の中の太乙（第一のもの）を以って、世を建て直したいという彼の願望は、死の間際に至るまで唱道され、これが、幕府の組織の中には勿論のこと、日本中に強力に浸透して行って、日本人の歴史観の実践に拍車をかけた。一斎の門人は数千を数え、吉田松陰、高杉晋作、佐久間象山、大橋訥庵などのほか、影響を受けた大名や家臣に至っては数を知らない。吉田茂は一斎の義曾孫に当る人である。

芭蕉は、万象を十七字に濃縮したといわれ、文学者として

浪史雲高霞影物 露露  
一帯一帯海龍子 為終系  
汝子探て天閻を叩かんことを

七十、車無し、底んぞ懸を用いんや  
今に抵り、挽做、強年なりと曰う  
鶯鷓、儘に新綴を遣わしむ  
猿鶴、奈何んぞ旧縁に違ふことを  
赴く所、期せず天一定  
無妄に於いて動く物、みな然り  
世間多少営々の者  
知るや否や、此の翁、真に憐むべきことを

この意味は、「私は七十の齢まで車もなく、貧乏暮しをしてきた。この年になれば、普通、天子から退官の車をもらって引退するところだが、そんなものもほしいと思わない。今になって、お前は丈夫で若々しいから官途につけ」といわれ、役人の新参になるのだが、そうなると、今までの野人どもとのつき合いをどうしよう。併し、人生の帰趨は天であり、真実の帰結は命による。世間の稼ぎ人たちに、俺の心がわかってもらえるだろうか、というほどのものである。

佐藤一斎の晩年（八十七歳）に安政の大獄が起った。井伊大老の手によって、天下の志士が投獄される、という事件である。この成り行きを憂えていた老学长・佐藤一斎は、「画竜に題す」という寓意で、次の詩を作った。

須臾にして、雲雨、乾坤を覆い  
霹靂一声、滄海、翻る

老子、安んぞ能く、汝の天に乗じて

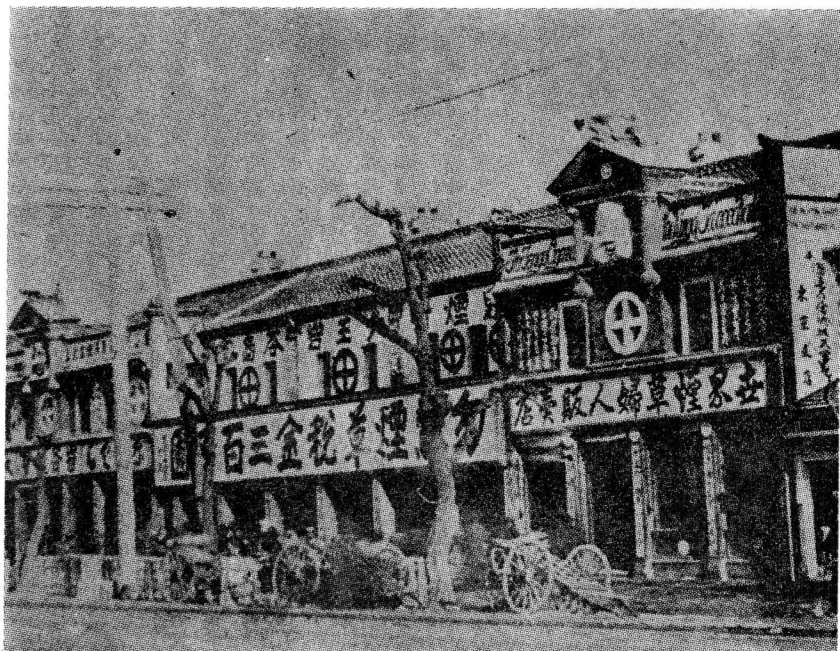
の偉大さを謳われる。芭蕉文学というものを江戸元禄に樹立したこの人は、杜甫も、李白も、道も儒も仏もあまねく取り入れて消化しているのである。日本に伝来した仏教を、「枯れた寂び」に大成して、文学として打ち出したのは芭蕉であり、日本人にこれを、身近にハッキリ握らせたのはこの人である。この意味で、芭蕉文学は、明治維新にたずさわった人達の人生観に、大きな影響を与えたものと云っていい。芭蕉の「野ざらし紀行」に左の下りがある。

「富士川のほとりを行に、三つ計なる捨子の哀げに泣有。この川の早瀬にかけて、うき世の波をしのぐにたへず、露計の命待まど捨置けむ。小萩がもとの秋の風、こよひやちるらん、あすやしほれんと、袂より喰物なげとをるに、猿を聞く人捨子に秋の風いかに

いかにぞや汝、ちちに悪まれたるか、母にうとまれたるか。ちちは汝を悪むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ。唯これ天にして、汝の性のつたなきをなけ。……」

この文章には、人の心に泌み通る力強いものが潜んでいる。文をつぶさに見ると、  
第一、三つばかり、哀れげ、露ばかり、捨置けむ、ちるらん、風いかに、悪まれたるか、うとまれたるか、悪むにあらじ、うとむにあらじ、など、すべて、断定をさけて、推量の表現にとどめている。

第二、喰物なげて通る——なげ与えていない。前の推量の表



日露戦争前、今の銀座松屋のところにあった天狗タバコ岩谷商会の店頭

現と併わせて、賦の表現を心掛けていた。  
第三、唯これ天にして、汝の性のつたなきをなけ——ここで、汝の性ときめつけ、「天地不仁」を云いきかせて、泣けと命令するのである。

こんな無慈悲な仕打ちが、なぜ、日本的仏教の大成したものと見えるのだろうか。急ぐ旅でもない芭蕉には、その捨て児を抱きかかえて、富士川のほとりの庄屋か寺院へ預けて、救済する余地もあったであろうし、食い物、着物を与えて、介抱することもできた筈である。このへんが文化国家の社会事業家や教育ママと、考を異にするところである。

芭蕉は、食い物を与えず、投げて通るのである。捨て子がそれを拾って食べようが、食べまいが、芭蕉自身にはかかわりないのである。捨て子には、過去、現在、未来につながる仏縁が具わっている。これを重んずる立場に芭蕉が立っているのである。芭蕉の「天性」は、一斉の「天一定」および、「汝の天」に通じ、詩経の「周の命」に通ずるものである。だから芭蕉は、捨て子を、「子育て地蔵」か「道祖神」にまかせて立ち去ることができるのである。

われわれは此の天の流れを、西郷南洲の「敬天愛人」に見、夏目漱石の「則天去私」に見る。また、人々の渡世に、「人事を尽して天命を俟つ」という言葉があることを知り、なお、子供を「さずかりもの」とする意味を理解するのである。

従ってこのように、東洋の思索では、ダーウィンの種の起

原についても、また、メンデルの法則についても、天を介在

させて考えるのである。また、きわめて簡単と思われる、一プラス一の数式でさえ、答は二と云いきらない。一男一女の「夫婦」に、もし、天が子供を授けない時は、やがて、後家となり、寡となり、一となり零に帰し、また、天が子供を授ける時は、三になり、時に四（双生児）に飛躍する場合もあるからである。アインシュタインも、これに似た考え方をしたようであり、釈尊も「諸行無常」という複雑な時空概念を思索して、物を考えた。

明治維新を中心に、前後の、マイナス、プラスの明治年間の諸行には、いつも流れてやまない天命の渦巻を確認することができる。その中で生々流転する諸行は、時に漂い、時に泊り、まことに、悠々然としている。

太平の眠りを醒ます正喜撰  
たった四杯で夜も眠れず

エンタープライズの寄港のような、そんな悠閑な事態でなく、米国の艦砲が日本に火ぶたを切らんとする寸前の、霹靂一声滄海翻るといふ、驚天動地の場合にさえ、蜀山人のこの狂歌が人々の共感を呼んでいた。

明治の中期に、米國タバコトラストが、日本に侵寇し来り、我が國のタバコ權益の買収に乗りかかった時、これにガンとして立ち向った一介の町人・岩谷松平は、全国民の支援を求めべく、次の商業標語を考え出している。

「勿驚、煙草税金、タツタ三百万円」

天狗と号し、天狗タバコの製造販売をやっていたこの男にも、天の声を聞くところがあつたのだろう。昭和元祿の商語の性急ないじらしさに較べて、いかに悠かで閑やかであるかを、感じ取ることができよう。

「林間、酒を暖めて、紅葉を焼く」（白樂天）。酒に爛をする場合、外の熱が酒に伝わって酒が暖まる、という説明は、われわれの次元では充分でない。われわれは、外の温と中の冷が、互いに交流するものと見、その働らきを「命」、その場を「天」と見る。天命は、偶然であり、必然であり、忽然であり、悠然である。この莊嚴に人道が通じ、その入り口に天闕（天の門）がある、と考える。

寒山は、「人、寒山の道を問うも、寒山、路通せず」と吟じ、時に、「登渉す寒山の道、寒山、路窮まらず」と嘯いた。イエスは、「命に至る路は窄く、その門は小さし、その路を得るもの少なり」（マタイ伝第七章）と説き、また、「汝等、力を尽して、窄き門より入れ」（ルカ伝第十三章）と教えた。アンドレ・ジードは、これによって「窄き門」を書いた。

明治維新は、徳川の封建「黒」を抹殺して、全く別な組織「白」を代入したのではなく、旧新の交換作用が、創造的に行なわれた、と見るべきであろう。

北宋の時に王安石が、新法を唱道し、旧法党の政策を抹殺して、「元祐党籍の碑」を建てて、旧法党をつるしあげにし



岩谷松平雅印の印影。文に曰く「國益之親王」。原寸十一厘角

た。やがて、この新法が行き詰りを来し、蘇東坡など元祐党が廟堂に帰った時に、東坡は、新法をむげに見殺しにしたかった。東坡居士の中には仏が宿っていたのである。

江戸の人も、明治の人々も、天地は造化が造り、病氣は葉

る。日本の詩の中で、万葉にも乏しいものを御製は捉えていた。また、維新と明治の人たちの詩情は、権力と組織に反骨を示すものであった。夏目漱石の知性は、人々にあらたな雅風を吹きつけて、官僚独善に反抗させ、森鷗外は、独特の稚気をもって、膨大な組織、強大な権力の日本陸軍を揶揄した。取るに足らない町のタバコ屋・岩谷松平（東洋煙草大王・國

師が治し、結婚は出雲の神がとりしきり、交通は閻魔が規制する、と考えた。そして、勸進帳の富樫の中に巣くう閻魔の声を語り、その所作を舞って楽しむのであった。

明治維新、昭和維新（二・二六事件）というような、維新と称ぶにふさわしい叛乱は、文明の生々流転として、人の心の中の「神」の漂泊として、理解され、受取られなければ、面白くなく、意味もない。

いま、明治維新の特質を拾って見れば、

第一に、被圧階級でなく、特権階級が蹴起していること。

第二に、物ほし気ではなく、特権を棄てようと考えていること。

第三に、独善的割拠をさけて、大同につく傾向が強いこと。

第四に、寄らば斬るぞは、話合いの補充にすぎず、天命の指示に従って事を運ぼうと心掛けていること。

第五、人心が、天命に安住しようとしていること。

などが挙げられる。大日本史と日本外史が、交々作用して対立の間に話の筋道を通したのは明かである。

このような、明治維新の進行に伴って、フランスは幕府方に、英国は朝廷方に力を貸そうとしたが、両者の中心的人物に知性とロマンがあつて、物欲し気が薄かったので、両国とも深入りすることをためらった。「武士は食わねど高楊枝」というマタイ伝の思想には、彼等も哀想をつかし、「貧乏人の子沢山」にあきれている間に、明治維新は成就した。

明治天皇の御製には光があり、王風（皇風）がそよいでい

益之親王）ごとき者にも、一種の王気が見られた。

明治維新は、黄老、儒仏を交じえ、人世の花として地上に開き、実を結んだ。明治陛下の中に劉備玄德が、西郷南洲の中に諸葛孔明が、勝海舟の中に范蠡が、藤田東湖の中に文天祥が、吉田松陰の中に蘇東坡が、佐久間象山の中に顔真卿が、渡辺崋山の中に介子推が、富岡鉄斎の中に豊干がいた。そして庶民の中には孫呉空や河童がうごめいていた。併し、悪魔や魔女の如き、非人格の物は仲間はずれにされていた。維新後に、征韓論があり、それをふまえて、日清、日露の両役が起った。日本は、この両役において、国運を義風に賭けてやった。日清戦争は、遼東半島や台湾が欲しくてやったのではない。その結果得た遼東半島は異邦人の干渉により、あまり未練を残さずに還附している。

明治陛下の信任厚かった第三軍司令官の乃木希典は、日露役の凱旋に当って、「一将、功なりて、万骨枯」と、涙を流している。彼の切腹はノイローゼのせいでもなく、枯れた万骨に侘るためでもない。天命にそむいて生きながらえている自分が、空しく感じられたからである。腹切りというものが西欧人に理解できないのは、仕方がないとしても、そろそろ日本人にも理解しにくい異様なものになりつつあるのではないだろうか。

大正になってから、日本は第一次世界大戦に参加し、またシベリヤに出兵した。これは、ルッソーの民約論に従って、

## 孔明

たつれふに國の志らば  
袖をわけてまればなりや  
いふ人もあれ

明治天皇御製御筆「孔明。たつのふす岡のしら雪ふみわけて草のいほりをとふ人やたれ」。明治神宮蔵

契約を履行したまでのことで、義風とは関係ない。

その頃から、日本人の気風が欧米に染まって来た。義風が算風に変って来て、神が声をひそめ、物が神の座に坐った。金剛神が人心の焼き入れのために下したといわれる鉄鎧・関東大震災の直後に、「国民精神作興に関する勅語」が喚発されたが、精神などという宙ぶらりんのものよりは、当時の日本人はお金が欲しかった。金がなければ西欧人につき合えないと思っただけである。銀座のネオンが派手になるためには、また、国内の失業群を解消するためには、西欧にならった殖民地擄取が、いちばん手っとり早いと思っただけである。日本はやがて、一等国の座につき、軍艦と大砲だけが民族のしあわせを呼ぶと考えるようになった。

昭和になってから満州事変から日支事変、それから大東亜戦争へ突入する時代となった。この間に、国民精神総動員や八紘一宇が叫ばれたが、不在の神に呼びかけてみても応答はなかった。八紘一宇という言葉は、大陸の権益擁護と裏腹になつて、かえって物ほし気に世界の耳目に響いた。この一連の外乱に私は従軍したり加担したが、権益を守るための愛国心は、愛社精神のようなものに転化していた。日本人の愛社心の力によって、アジアの諸民族は、軍需会社・日本帝国の下請け職方として、鉄鎖を解かれ、解放された。

権益とは何か？ 長い目で見れば国民の財産であろうが、国内の大義が消滅して居り、大陸殖民地に根を張る財閥と軍軍歌演習でやることを命じたりした。兵隊達は、屈原の義氣に酔い、何やら憂国の志士の気分を味わい、へん屈な世の中に一脈の折り目が立つような気がしていた。併し、この歌は、事件直後禁止された。

明治の気風が流れていた時代は、変乱にも、平和にも、祈り(PRAY)があったが、大東亜戦の頃になると、いつの間にか、RがLに変つて、遊戯(PLAY)が天下を横行し、プロレスの反則のようなことが平気で行われるほどに、日本の道義は低下していた。そして、算盤ではじき出せるかぎりの合理主義と、無機質の法が人間を縛っていた。

昭和七年の五・一五の叛乱者は、時の首相・犬養毅の命を奪ったが、この被告たち(海軍)は、死一刀を減ぜられていた。しかるに、それから四年後の二・二六事件の叛乱者は、時の首相・岡田啓介の命を奪いそこなつたが、この被告たち(陸軍)は銃殺された。死一刀の加減は陸海の物の考え方の違いともいわれようが、私は社会の断層をそこに認めるのである。五・一五の裁判には、朝敵・西郷隆盛に復権を認め、更に贈位するというような、法(きめごと)を超えた観世音菩薩の判断があつた。が、二・二六の軍法会議には、菩薩も仙人も介入できず、ルイ十六世の首をチョン斬つた非情の夜叉が座を占めていた。

そんな気配を身を感じていたわれわれは、この事件の直後第一師団の満州派遣が決定して、海を渡る事になった。兵

闊のみが肥つて、我が世の春を謳歌し、そのために資本と榮達に縁の薄い、水呑み百姓や町人の小憚が血を流す理由はないと考えたのが、榮達を約束された二・二六事件の将校達である。精神が失われて義気が薄らいだ西欧に似た当時の社会相には、社会主義の理論が、割合にうまく当てはまった。

赤い灯青い灯が揺ぐ道頓堀の川波は、明治の軌道から脱線して、百年も昔、十九世紀半のテムズ河の波紋に似てきていた。そして、一方、大正期に施行を見た普通選挙は、デモクラシーを推進し、多数決を乗せた船を、流行という舵を握るマスコミが誘導して、頹廢(デカダンス)の淵に追いやってた。そして、日本人の伝統的な知性は、その坩堝の中で蒸発し、歴史が、それまでに、保持育成した真善美は、株主総会の議決権方式の前に、ひれ伏した。こうして出来上つた権力は、前時代の力が、権力と組織に反抗したのとは逆に、天皇制に附着して増大して行つた。

それ故に、二・二六事件は、「君側の奸を除く」という目標を掲げて起つた。この時の鉄砲の引き金は、「御免」の挨拶で引かれたし、抜かれた軍刀は、「許せ」の折りをこめて斬り下された。

私は事件当時、歩兵第一聯隊の七中隊に所属し、周番上等兵の勤務をとつていた。中隊長山口太郎大尉は、常々、老兵の私を、叛乱企画に使うのに都合のいい男とし、叛乱司令部で使役し、時には、「汨羅の淵に波騒ぐ……」屈原の歌を、

隊たちは、屈原の歌が消えた後に流行しはじめた亜細亜の歌、「有色の屈辱の下、喘ぐ者、亜細亜、亜細亜、奪われし我等が亜細亜」を、こんな替え唄にして歌つた。

夕食のおかずはコロッケ、さつまいも

味は味は、うまくない、われらの味は

「あなたは、二・二六事件について、何かお考になつたことがありますか」

「いや、別に……」

「それでは、二・二六事件について、一番印象の深かつたことは？」

「さあね、コロッケとさつまいもはまずかつたが、里芋と豚肉を味噌で煮たやつはうまかつた。味噌に残っているね」

二月の末になると、農家は芽吹き前の里芋を大量に出荷する。街の焼芋屋は、そろそろ、きぬかつぎ屋に転向し、軍隊でも里芋を大量に仕入れる。寒さに耐えて、脂ののりきつた豚もうまい時季である。里芋と豚肉を無雑作に切り、これを味噌で煮つころがしにしたおかずは、何とも云えない珍味だつた。これは歩兵一聯隊の名物料理の一つであつた。

そんなおかずで、麦飯をバクついてから、周番上等兵の私は、中隊事務室で番茶を喫っていた。消灯ラッパが営庭に響き渡つて、不寝番が隊内を巡り始めた。間もなく、火災盗難の予防を主務とする不寝番の一人が、中隊長室から酒瓶を預かつて来て、燗をせよといわれた、という。その取締りの役

の私は、冷酒を少々ピンハネして、そのあとを、やかんで暖めて、不寝番に運ばせる。将校の出入りがはげしく、「敬礼ノ」と叫ぶ不寝番の声が絶え間ない。事務室のつまみにせよと、中隊長殿がよこされました、と、不寝番が殻つきの南京豆を一つかみ持って来る。

「お前、ピンハネを中隊長に云った、な」

「いや、申しません」

「物入れの、そのふくらんでる物は、何だ」

「はい、落花であります」

「ああそうか」

花吹雪日本淋しくなりにけり 青 嵐（永田秀次郎）

こんな句と自分たちとの関連に心を留めぬ一銭五厘の兵隊は、ニコニコして敬礼して出て行く。二月二十五日の夜半も過ぎて、闇の営庭に、とめどなく雪が降っている。周番下士の石田伍長が、「吉田、そろそろ寝ようとするか」と云う。

降る雪や明治は遠くなりけり 草田男

雪は豊年の兆ともいいうが、時に悲劇を生むことがある。義士の討入りも、桜田の変も、また昭和維新も雪に化粧された。今日出海氏は、「西洋の悲劇は人と人との葛藤から生まれるが、日本の悲劇は、古代ギリシャの悲劇のように、運命の悲劇である」と、云った。

願くば花のもとにて春死なん

そのきさらぎの望月のころ

西行法師

古来、日本人は生死を命運と見、これを花鳥風月に托して、人はその陰に身を潜めて、これを運り合わせと観じてきた。仏教の無常観や不浄観というようなものも、雪月に掩われると、日本的な香りを帯びてくる。興亡も変遷も、戦乱も泰平も、命運であり、縁であるとする。従って、その中で人間の渡世を「運鈍根」で割り切ることとし、決してエネルギーや資本力を用いようとしない。哀しみを、むら雲に月がかくれるが如く感じ、一陣の風に散る落花に歎こびを感じるのである。

川端康成氏は、ノーベル賞受賞の夜、「秋の野に鈴鳴らし行く人見えず」と句した。野を行く巡礼の姿は見えず、ただ鈴の音だけが聞こえてくる。人間に纏わる命運―毀誉と褒貶―が、尾花が揺れるように、鈴の音の中で響き合っているではないか。幽けくも明らかに、治維新〜と。

この「明治維新考」は、東京名物誌の明治百年記念第二号のために、特に執筆をねがったものであります。それが明治百一年早春号に掲載されました。各方面から絶賛を博した作品であります。今回も財団法人・東洋文庫等から永久保存の指定を受けたのであります。少しく長編に墮すること、内容からして庖丁余語には適せず、と、筆者は云われますが、今回の「明治維新考」は、若い方々と語りという点で、前回の「寒山片雲」と、その前の「肉食談義」とは、別の意味をもつものとして、貴重でありますので、これを庖丁余語第七号として、再版をお勧めいたしましたのであります。弊誌掲載の文章に、多少筆を加えて頂き、東翠・清水董三先生の題字を掲げ、更に各方面の御好意による図版を追加して、茲に再版いたしました。

東京名物編集主幹 千賀富士男